

# 二十三夜

萩原朔太郎

青空文庫



『エ、おい、べら棒な。恚かう見えても急所だぜ。問屋の 莧こんにや』

蕩くぢやあるめいし、無價ただで踏まれて間に合ふけえ』。

おほへべれけ

いなせはだ

大泥酔の粹背肌、弓手を拳で懷ふところ中に蓄へ、右手を延ばして輪を畫くと、手頸をぐいと上げて少し反身のかたち。

向合て立つたのは細目の瘦形、鼻下に薄い八字を蓄へて金縁の眼鏡が光る、華奢のステツキに地を突いて、インバネスの袖を氣にしながら對手が悪いと見て、怯氣おちけた體てい、折折無氣味相さうに、眼を轉じて前後を竊視する。

蓋し『力は無かりけり』の標本男。

『エ、おい何とか言はねえか、物を言はねえかよ、唐變朴』

『……………』

『踏んだら、踏んだと言ひねえな、確かに私が、踏みましたと詫びりや、すむ事ことツた。おい。』

『だから謝罪あやまつたと云ツてるぢやないか、先刻から。』

『だから謝罪た、へん其様な横柄な言草があるけえ、踏みましたから、御免下さいましと云ふもんだ。何でえ、失敬しただあ。

己そんなあ其様に唐人言葉は知らねえ日本人なら日本の言葉で言へ、恚かう最う少し胸の透く様な文句を利きいた者だぜ』

痛罵しえて意氣昂然たり。颯然さつと二の腕を捲ると、生白い肌が現出れて酒氣を帯びた頬が薄赤い。

此の日偶あだかも然○○不動の縁日。

涼を取るべく連立た人。白い浴衣。黒い帯。萌黄の帷子かたびら。水色の透綾すきや。境内は雑然としてかんでらの燈火あかりが四邊あたり一面の光景ありさまを花やかに、闇の地に浮模様を染め出した。

香水、麝香、油煙、マニラの臭氣相混じて一種縁日臭を作り、霽々然として、人自らそが上を踏み、そが中を歩めり。

『喧嘩だ、喧嘩だ、』

背中を突かれて驚く男、袂をくぐられて間諜付く女、跳ね飛ばされて泣くは子供、足下を攫はれて轉ぶまろが年寄、呆氣に取られた人人の間を縫て、矢の様に走つて行く一人の男。

『ほれ喧嘩だ』

と、云ふとドツと一時に動搖どよめいて一崩れ、ばたばたと男の後を

追うて、津浪が押し寄せた様、逸早く合點した連中は、聲を擧げて突貫した。されば菓子屋、植木屋、吹屋、射的場の前には、今一客を止めず。吹屋の姐ねえさんは吃驚びつくりした半身を店から出せば、筆屋の老翁おやぢは二三歩往來へ進み出て、共に引き行く人浪の趾を見送る事、少時しばし焉したり。

譬へば或る時、大目玉を引ン剥むいて、毛剃にらみが白眼にらみ　した百萬の唐船も斯くやと許り。十重に二十重に引ツ絡んで喧嘩の火の手を焚き付け様と云ふ、江戸ツ子のいらぬ意氣地。

『足を踏んだのは僕が悪かつた、悪かつたから謝罪あやまる、ねえ君、これは僅かだけれど膏藥代に、な、納めて呉れ玉へ、さあ』

相手の心事、酒代にありと見て取つた若紳士は、事の組し易きを

喜んで、手早く握つた銀貨、二枚、三枚、光る物手をすべつて男の掌に移るよと見る間に「呵あ」と叫んで紳士は身を轉換かはした。途端、目標あてを外れた銀貨はチチンと小石に衝突あつて、跳返はねかへつて、回轉まはつてベタリ。

『間拔奴、見損やがつたか、汝うぬ、記憶おぼえとけ、深川の芳兄よしいてで鳴らしたもんだい、手前達てめいの様な、女たらしに、一文たりとも貰ふ覚えはないぞ、ヘツ、どうだい、その面つらは、いやにキヨロツキやがつて、憚乍ら口惜しけりや腕ツコキで来い、白痴ばかッ』

『女たらし』の一言に力を罩めて憤怒の焰燃ゆるが如し、果然彼には一物あり。相手は何處迄も御人好の御坊ちやまの、泣き出し

相に、なさけない顔でおろおろして居るまだるつこさ、芳公の啖呵も折角、響が來ないので、聊か之も張合なさの悄氣しよげた體てい。

此の處、年の頃十八九と見える色白の、艶然ぱつとした中形單衣、夜

目にも透いて見える襟脚の確くつきり乎白きに、烏羽玉色の黒髪を潰し

島田に結んだ初うひうひ初うひうひしさ、濃こむらさき紫の帶を太鼓に結んだ端が二寸

許り、たれてその先が地に着かんとして觸れ合つて居る。

紳士の影に潜んで顔も上げず、蹲うづくま踞つて、風呂敷の包物を膝に

かかへた儘、胸どぎまぎ悸して居るのが不圖目を見張つて、壯わかもの侠の顔

を偷視る、途端、その亦鋭い視線と出合つて、俯向と急に顔色を

變へた。

『斯う成つちやあ一番腕ツコキだ、さあ野郎、文句は言はずと、

出ろ』

男は片脚はづして下駄を脱いだ。

『イヨー、あにい大哥』

『えらいぞ』

『音羽屋ア』

『やつちえねえ、骨はおれが拾つてやる』

彌次馬の騒ぐこと、夕立の如し。

『では、どうすれば好いんだ、ど、どうすれば……腕力なんて、

野蠻な……僕は』

紳士は相手の權幕に、震へ聲を出して、殆ど、全く、實際、困つた様子。此では到底喧嘩に成らない品物。しろものと知つてか、芳はいら苛

つて圖に乗り、無理にも賣らずんば止まざる底の心掛。

『いやにじれつたいな、何うにも、恚おッうにも、恐おッかないなら、手を地べたに着いて謝罪んねえ、そこへ坐つて、チエツ、意氣地のない青二才だ』

「カツ」と痰を吐いたのが、胸の處へベツタリ絡みつく。

『なにをする』

流石の男も、少し正氣むきになつて、激した口調で

『失敬な、貴様は』

『何だと』

芳は體を突き出した、苦み走つた、黒い眉毛がヒリリと動く。

『やつちまへ』

『疊ん仕舞へ』

彌次馬の聲援、畢竟は我が味方と、芳は勇み立つて、無手と對手の襟髪を掴むや、馬手の下駄は宙を飛んで、その頬ほほ桁げたを見舞はんとす。

『あれ、芳ちやん』

此の時女は耐り兼ねて、紳士の背後うしろから躍り出た。

『芳ちやん、お待ちツてば、アレ、そんな手荒なことを』  
かよわ 纖弱い腕を延べて、男の右手に搦み付く。

『何をする、賣女ばいた』

芳の眼色は、急に變つて體からだ軀だが震動ふるへた。

『う……うぬ、穢れだ』

満身の怒氣を込めて、身を蹴くと、無残、女は胸を一つ突かれて、仰向にばつたり倒れる。

隙を窺つて紳士は二足、三足、たぢろぐよと見る間に身を返して一目散、人垣の間を別けて行衛も知れず。

芳は狂氣の如くなつて、追ひ掛けんとした。人垣は急に崩れて、大風に偃す野草の如く、芳の通路を拓けども、何分多人數であるから、幾重にも犇犇と垣あり。

『邪魔するな、ヤイ』

前に立つた男を突き飛ばして、なお吼けり行かんとする先に、亦もや手を拓げた一人。

『なぐれ』

『たため』

『しめろ』

雜然たる叫聲の中、殺氣は既に滿ち渡つて、氣早の若者は行いきなり成横合から飛び出して、思ひ切り芳の天窓あたまを擲つた、續いて何處よりともなく、拳の雨は彼の頭上に降り注いだのである。意外。味方と思つた彌次連は、先刻さつきから傍若無人の暴言を小面憎く思つて居た、敵であつたのだ。

不意を打たれて芳は危く昏倒せんとして、僅に身を支へた、其處を、勝に乗じた群衆はなほ、執念強く、取り包かこんで、凡そ息のある限り、滅多無性に打ちすゑんとする、刹那の急。

折から翮ふはり乎と、何物か芳の體軀に抱き付いた。

此の混雜の中、ほとんど夫れが、天から降つたかの如く、人人の眼には見えたであらう。ひらひらと紅の裙くれなるすそが燃える、女だ、若いぞ。

足袋裸足で痛痛しい、胸が開張はだけて、雪の肌が白百合の匂ひ、島の根が外れて忙しい呼吸いきづかひである。

『芳よ……芳ちやん』群集を振り返た時にはおろおろ聲で眼が血走つて居る。やがて凜とした甲聲かんごゑ

『殺せ、殺せ、妾を殺して……こ……この人に罪は無い、みんな妾が悪いのだから』

婀娜なまめかしい襦袢の袖が縫れて、男の肩に纏綿まとはる。背後から靠もたれか掛かる様に抱きついて密接びつたり顔を押し附けると、切なげに身を悶

えて

『堪忍してよ、芳ちやん……………』

『……………』

男は何か言はうとして、僅に手先を動かしたが『阿伝』と一唸呻、言下に反繰返つて仰様に僵れた。

『あれ』

屍を守る見様で、棒の如く突立つた女は、臆て俄然と身を投て、伏重なつたと思ふと、熟と僵れて身動も仕無い。

此の夜、風多くして、廿三夜の月が紺屋の虎落を登つた。



# 青空文庫情報

底本：「萩原朔太郎全集 第三卷」筑摩書房

1977（昭和52）年5月30日初版1刷発行

1986（昭和61）年12月10日補訂版1刷発行

※『エ、おい何とか言はねえか、物を言はねえかよ、唐變朴』は底本では折り返した行は天付きになっています。

入力：kompass

校正：小林繁雄

2011年6月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二十三夜

萩原朔太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>